

翻弄されながらも

丸山 勉

〔聖書〕 ルツ記 1章 7b～22 節

故国ユダに帰る道すがら、ナオミは二人の嫁に言った。「自分の里に帰りなさい。あなたたちは死んだ息子にもわたしにもよく尽くしてくれた。どうか主がそれに報い、あなたたちに慈しみを垂れてくださいますように。どうか主がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与え、あなたたちが安らぎを得られますように。」ナオミが二人に別れの口づけをすると、二人は声をあげて泣いて、言った。「いいえ、御一緒にあなたの民のもとへ帰ります。」

ナオミは言った。「わたしの娘たちよ、帰りなさい。どうしてついて来るのですか。あなたたちの夫になるような子供がわたしの胎内にまだいるとも思っているのですか。わたしの娘たちよ、帰りなさい。わたしはもう年をとって、再婚などできはしません。たとえ、まだ望みがあると考えて、今夜にでもだれかのもとに嫁ぎ、子供を産んだとしても、その子供たちが大きくなるまであなたたちは待つつもりですか。それまで嫁がずに過ごすつもりですか。わたしの娘たちよ、それはいけません。あなたたちよりもわたしの方がはるかにつらいのです。主の御手がわたしに下されたのですから。」二人はまた声をあげて泣いた。オルパはやがて、しゅうとめに別れの口づけをしたが、ルツはすがりついて離れなかった。ナオミは言った。「あのおり、あなたの相嫁は自分の民、自分の神のもとへ帰って行こうとしている。あなたも後を追って行きなさい。」ルツは言った。「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に／そこに葬られたいのです。死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。」

同行の決意が固いを見て、ナオミはルツを説き伏せることをやめた。二人は旅を続け、ついにベツレヘムに着いた。ベツレヘムに着いてみると、町中が二人のことでどよめき、女たちが、ナオミさんではありませんかと声をかけてくると、ナオミは言った。「どうか、ナオミ(快い)などと呼ばないで、マラ(苦い)と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。出て行くときは、満たされていたわたしを／主はうつろにして帰らせたのです。なぜ、快い(ナオミ)などと呼ぶのですか。主がわたしを悩ませ／全能者がわたしを不幸に落とされたのに。」ナオミはこうして、モアブ生まれの嫁ルツを連れてモアブの野を去り、帰って来た。二人がベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れの始まるころであった。

〔序〕 宝石のような「ルツ記」

「わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。あなたの民

はわたしの民／あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に／そこに葬られたいのです。」(16～17 節)

ルツが義理の母親（姑）であるナオミに語った美しい言葉です。この言葉には**ナオミに対する信頼と愛**があります。口先だけとは思えません。どこまでもあなたの許を離れません。そして、あなたの信じておられる神様を、私の神様と致します、という**ルツの信仰告白**でもあります。しかし、この言葉は、生活がうまくいっている、いわば順境の中で語られた言葉ではありません。むしろ逆ですね。生きていく苦労や悲しみもある、そういう中で語られた言葉です。この言葉は、言ってみれば、このルツ記全体の主旋律だと思います。

ルツ記そのものというのは、まあ士師の時代の話ということですが、何かとりわけ大きな出来事が起こるわけでもありません。つましい庶民の話です。しかも女性の名前がタイトルになっています。（他に「エステル記」のみ。但し、エステルは王妃）。そういう書物を昔から信仰者は大事に読んできました。それはとても意味があることではないでしょうか。

私たちはもちろんこのルツ記が、**イエス・キリストの系図につながる**ということ、いわば**正典の一つ**として大事にしているわけですが、私はただ単純に、この古代のパレスチナ地方にあって、信仰者として、助け合いながら素朴に生きるということを描いてくれている宝石のような書物だなと思います。

[1] 運命に翻弄されながらも

1章の初めを見ますと、**ナオミ**が夫**エリメレク**と二人の息子たちを連れて異教の地モアブに居を構えるようになったのは、ユダに**飢饉**があったためです。**古代パレスチナの生活**です。飢饉というのは大変だったに違いありません。生きていくことに直結です。現代の私たちからすると想像が及ばないこともあります。このルツの時代も大麦や小麦の収穫や刈り入れが、その日生きていけるかどうかにか結び付くわけです。私たちは冷蔵庫があって、電子レンジがあって、大型スーパーがあってお金で食料を買うことによって生活することが当たり前のようになっていますが、この時代は、勿論そうではありません。**気象条件**によって生活は大変な影響を受けます。それに翻弄されると言ってもいいと思います。

さらに**ナオミ**とそのお嫁さんの**オルパ**と**ルツ**にしてみれば、大変過酷な運命を背負わされました。ナオミの夫エリメレクはここモアブで死んでしまい、ナオミの二人の息子つまり**オルパ**と**ルツ**の連れ合いも若くして死んでしまったのです。何ということでしょうか。それまで6人で生活していたのに、3人の女性だけになってしまいました。**運命に翻弄されている**と言いたくなります。しかし、その中で助け合っ

て生きていたのでしょうね。

やがてベツレヘムでの飢饉が和らいだという知らせを聞いたナオミは、故郷ベツレヘム（「パンの家」の意）に帰ることを決心します。後で分かりますが、ナオミは一人で帰ろうとしたのです。その決意は固いものでした。何故か。二人のお嫁さんたちの将来を案じたからです。当時レヴィラート婚と言って、跡継ぎがない場合、その死んだ者の兄弟と結婚して跡継ぎを設けるとというのが律法にありました（申命記 25 章）。けれども、ナオミはもう子供を産むなどということはないので、あなた方は、私のようにやもめとして生きるのではなくて、この故郷のモアブに留まってそこで再婚をしたらよいと考えました。これはナオミのお嫁さんに対する愛情ですね。

ナオミは言いました。「自分の里に帰りなさい。あなたたちは死んだ息子にもわたしにもよく尽くしてくれた。どうか主がそれに報い、あなたたちに慈しみを垂れてくださいますように。どうか主がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与え、あなたたちが安らぎを得られますように。」—ここには、ナオミの信仰が見てとれます。「主が慈しみを垂れてくださいますように」「主によって安らぎを得られますように」と言っています。彼女にとって、異邦の国の者であっても、神様の恵みは与えられると信じていたのです。当時としては民族主義を超えた大きな信仰の捉え方ではないでしょうか。もしナオミが偏狭な信仰の持ち主だったら、異邦人であるルツもオルパも一緒に生活することは辛かったと思います。でもそうではなかった。恐らくは、そんなナオミの愛情に裏打ちされた信仰が、ルツやオルパの心を打ち、「あなたと一緒にいきたいのです」と涙ながらに言わせたのだと思います。

しかし、オルパは、ナオミの思いが固いことを知り、また自分の将来を考えてくれたの言葉だと思い、別れの口づけをしてモアブに残ることを選びました。これも選択の一つです。良い悪いではないでしょう。しかし、ルツはそうではなかった。そして先ほどの言葉を語ります。少し前（16 節）から読みますと、

「ルツは言った。「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に／そこに葬られたいのです。死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。」」

これは、ナオミに対する同情の言葉ではないと思います。ルツにとって、もはやナオミから離れた生活など考えられませんでした。それほど自分にとっても大事な存在になっていたのです。ナオミによって自分が支えられている。夫（ナオミの息子）が

死んだ時も共に悲しんでくれた。慰めてくれた。そしてそのナオミの心の中心には神様というお方がいらっしゃる。わたしもその方を、ナオミと一緒に信じて歩いて生きたい。この地上の命が終わるまで一緒に生きてゆきたい。そう言ったのです。何と強い言葉でしょうか！ さすがのナオミも言い返せず、「**決意が固い**のを見て、**ナオミはルツを説き伏せるのをやめた**」と書いてあります。ナオミとルツの真剣勝負と言いますか、真摯なやりとり、こういった所がとても胸に響きますね。

[2] ナオミのユーモアと逞しさ

1章 19～21 節をお読みします。

「二人は旅を続け、ついにベツレヘムに着いた。ベツレヘムに着いてみると、町中が二人のことでどよめき、女たちが、ナオミさんではありませんかと声をかけてくると、ナオミは言った。「どうか、ナオミ(快い)などと呼ばないで、マラ(苦い)と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。出て行くときは、満たされていたわたしを／主はうつろにして帰らせたのです。なぜ、快い(ナオミ)などと呼ぶのですか。主がわたしを悩ませ／全能者がわたしを不幸に落とされたのに。」

ここの所も面白いところだと思いました。故郷ベツレヘムへ帰ったナオミが、知り合いの女性たちに会い、**愚痴をこぼしている**のです。しかし、このナオミの言葉だけを読むと、あれ、ナオミさん、神様に文句言って信仰的ではないなと思ってしまいますが、私はここにも**ナオミの信仰が表れている**ように思うのです。ここには**ユーモア**があると思います。知り合いの女たちだから、自分の名前を使って「私の名前は「ナオミ＝快活」といった意味だけど、その名前と逆で、神様は私にひどい事をしたんだから。夫も息子たちも死んでしまったわ。私の名前はむしろ苦労の連続だから「マラ」が相応しいかもね」と言っているのですけれども、私はそう言えるということ自体、苦しみの渦の中に巻き込まれてしまわずに、自分の状況というものを客観的に見て取って、「**神様に”文句を言っている**のだな、と

思いました。これは「**信仰**」だと思えます。多くの「詩編」も嘆きそのものを神様ご自身にぶつけていますよね。言葉の内容の問題ではないのです。私たちは誰に自分の思いをぶつけるのか、それが神様であれば、イエス様であれば、それは「信仰」なのですね。

ナオミは、知り合いの女たちに、多分少し笑いながら語ったのではないのでしょうか。それは、「この世の不幸」の向こう側を見ている**眼差し**です。ナオミは、悲しい現実にくっつきながらも直面しながら、それに押しつぶされてはいません。それが証拠に、来週見る所ですが、ルツに好意を寄せるボアズのことを耳にした時にこう言っているのです。2章 20 節です。

「どうか、生きている人にも死んだ人にも**慈しみを惜しまれない**主が、その人を祝福してください」。—これは凄いな言葉だと思えます。彼女は過酷な人生を通らされて

いても、神様の愛を疑ってはおりません。いやそれどころか、**死をも超えて恵みを給う神様を信じている**のです。これがナオミの精神的逞しさの要因ではないでしょうか。

そのナオミの信仰に、ルツもきつとこのように生きて行きたいという求めや憧れを与えられたのではないかと思います。「この人の信じている神様は、私が聞いていた神様とは違う」と。**信仰というのは、人から人へ**、ですね。

ナオミは、この辛いことが多く、まるで運命に翻弄されているのではないかと思える人生を送りながらも、**この地上に留まらない、突き抜けた視点**を持ったのです。

【結】 仮住まいの身の者として生きる

聖書は、私たちに告げています。私たちはこの世にあっては寄留者だと。

「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります。」（一ペトロ 2:11～12）

私たち信仰者は寄留者・仮住まいの者である、ということは、何かこの世をあきらめて世捨て人のようになって生きろということではないのですね。ここでも語られているように、天の故郷が約束されているからこそ、「**異教徒の間で立派に生活しなさい**」と言います。それがあなたの生き方を通して、周りの者がまことの神様をあがめることに繋がるのだ、と言っています。

今日招きの聖句として読んで頂いた詩編 48:15 にはこうありました。—「この神は、世々限りなく私たちの神。死を超えて、私たちを導いて行かれる、と」。もちろん、この時代まだイエス様の十字架も復活もありませんけれども、ルツ記も詩編も旧約聖書全体はそこを目指していると思うのです。私たちは天の故郷を、言わば「先取りして」この世を生きている、生かされているのです。

そして、よく考えて見ますと、**最大の寄留者はイエス様**かもしれませんね。神の独り子であられる方が、天のみくらをお捨てになって、私たちと全く同じ人間になって下さいました。私たちの労苦、悲しみ、試練を分かち合い、共に歩いて下さるために。そして、私たち人間が本当に神様の所に帰れる道を、イエス様ご自身が十字架で私たちの罪を全部背負い込み、作って下さったのです！ だからもう「死」は滅びではありません。私たちが本当に神様の似姿に変えて頂ける祝福の約束です。

今日のルツ記 1 章の最後にはこうありました。

「二人がベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れの始まるころであった。」（22 節）

神様が生きておられるように、時や季節も必ず変化します。私たちが絶望しないように、神様は、季節のめぐりや自然界の実りを与え、食料を得、また花を咲かせ、楽しませ、私たちが生きるように配慮をされているのではないのでしょうか。これもまた、単に刈り入れ時が来たな、という現象面の向こうに、神様が私たちに顧みていて下さる、という「信仰」の眼差しが暗示されていると思うのです。

モアブは異教の地でした。ルツも異邦の女性です。しかも、この時はまだ跡継ぎがないやもめでした。神様の恵みの外にあると捉えられていた。けれども、まことの神様の眼差しは、律法主義、民族主義を超えているのです。そのルツの末裔から、この世の救い主イエス・キリストが誕生したのですから。

今日一緒に歌いたいと思った讃美歌は、「この世はみな神の世界」です。昔の讃美歌では「ここも神のみ国なれば」という歌でしたが、これは英語の歌詞ですと、「This is my Father's world」となっています。この美しい自然界は神様の世界だと歌い、それだけでなく、この人間の社会も、そして私たちの人生も、まことなる神様のご支配の中にあるのだ、その眼差しを持って生きていこうという歌詞です。

主イエス・キリストが、いつも私たちの根底にいて、人と人とを結び付けて下さいます。信仰の目を上げて歩んで生きたいと思います。

お祈り致します。